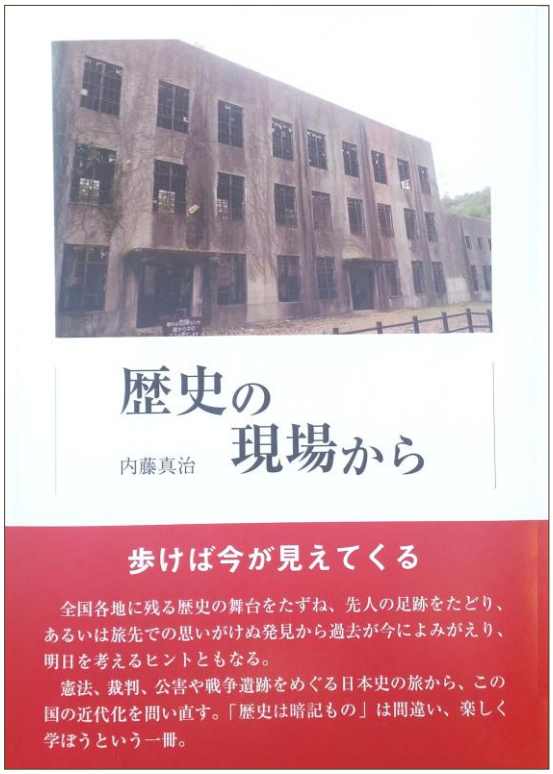
資料文献コーナー

『歴史の現場から』　内藤　真治著

東銀座出版社　　２０１７年４月発行　税込 1,500 円

安中市・萩原　慧



〔一〕「現場」に立てばイメージがふくらむ

この本の「はじめに」で内藤さんは「自分が生まれるよりはるか以前の、距離的にも遠いかなたに起った出来事を実感として追体験するのは容易ではありません。「タイムスリップ」という言葉はあっても、現実に時間をさかのぼることは不可能だからです。ならばせめて「現場」に立てば、よりイメージがふくらむのではないか。教師たるもの、できるだけ現場を踏んで教材を提示することが必要ではないかと考えていました」と述べています。

この本は、21 のテーマに分かれていて、憲法（「武蔵五日市の民主主義」「自由は土佐の山間より」「日米協働の創作物」）・日本の近代化（「漱石の予言」「啄木追っかけ旅」）・裁判（「ああ、裁判」「真実は壁を通して…松川事件」）、比較的気楽な「旅行けば」気分のもの（「寅さんの「現場」を行く」「地名に歴史あり」、「「忠臣蔵」人気の不思議」「逃亡者・高野長英」①②　「「りょうま」がゆく」「オッペケペーと演歌の心」）、公害と戦争に関わる話題（「真の文明は＜足尾鉱毒事件＞①…富国強兵の裏側」「同②…政府・大企業とのたたかい」「同③…国の富とは何か」「兵どもが弾丸の痕」「爆弾は「偏西風」にのって」「国内最大の引越し計画…松代大本営」「地図から消された島…毒ガスを製造した大久野島））の大きく 3 つにくくることが出来ます。コラムが 2 つあります。源義朝の死と「蒙古塚」を扱ったものです。

（二）玉村ショック

内藤さんはあるところで次のように述懐しています。

「玉村高校でショックだったのは、転任した年に一人の女子生徒から貰った暑中見舞いのはがきに「先生がこの学校に来たのは間違っています。とてもよい話をしてくれるのに、クラスの大半の子は寝ています。もったいないです。もっと先生の話を聞く生徒がいる学校へ行くべきです」と書いてきたことでした。多くの生徒は、中学時代「勉強したくないヤツはしなくていいぞ、玉高へいけばいいんだから」といわれてきたというんですね。私はいきなり担任した 3 年生から「なに馬鹿なこと言ってるんだ。約束が違わい、オレは勉強しなくていいというからこの学校に来たんだ。勉強しろなんてい言われる筋合いはねえ」「きのうきょう来たべえでっけえツラすんな」「ちっとんべえ勉強できるからっつって、でっけえツラすんな！」といわれました。実に面白い言い方だと思いました。どうやったら寝かさない授業が出来るか、私の格闘が始まりました。生徒にも保護者にも、ことばの通じない世界に迷い込んだ気分でした。どうすれば気持ちを通い合わせられるようになるのか。うんと鍛えられました」。

（三）授業検討会メモ

玉村での話はまだ続きます。

「互いに授業を見せ合って、放課後職員会議並

みの規模で授業検討会を開きました。1991 年、その時、内藤さん 54 歳。内藤さんが作った歴史の授業についてのメモには、①歴史は暗記物ではない。「ここは試験に出るぞ、よく覚えておけ」式の言い方が歴史嫌いをつくった。意味も分からずに覚えこんだことを答案用紙の上に吐き出すようなテストは無意味だ。日本史の試験は教科書とノート持ち込み OK、大切なのは片々たる知識を覚えることではない、素材を組み合わせ、考えて答えを導き出すことだ。でもこれって難しい。②歴史は科学だということ、根も葉もない作り話ではない。証拠（史料・資料）に基いて過去を復元できる＜方法＞、つまりどうすれば過去の事実を知りうるかを知ってほしい。③「すべて疑わしい」があらゆる学問の出発点。教科書に書いていてあることを全て正しいと鵜呑みにするな。先生の言うことだって間違っていることがあるぞ。ウソを承知で言うことはないが、勉強不足だったり、新しい研究成果が出てきてこれまで正しいとされてきたことがひっくり返ることだってあるんだから。注意すべきは「不可知論」。「本当のことなんかわからないのなら、勉強したって意味ねえ」となってはならない。「現在の段階でここまで分かった。しかしそれも間違っているかも知れない」。そのようにして限りなく真実に近づいていくのが学問の進歩というものだ。④勉強とは自分を知ることだ。自分を取り巻く社会を分かることだ。

授業を進める上での注意点。理屈をこねるのでなく、事実をして語らしむること。「ことば」のみを媒介にしたのでは、生徒に理解してもらうのは困難。そこで「モノ」語り（モノに語らせる）、実物、レプリカでもいい、史料・資料ともに。そして、教員には役者のような演技力も求められてる。」

内藤さんは、メモにあることを踏まえて、工夫して授業に生かしています。そして、「現地を踏む」もそうした工夫の一つとして磨きがかけられたのでしょう。そして、「なあ、内藤先生の授業はおもしれえぜ」となったのです。

こんなにながながと引用したのは、玉村の授業実践の中で、内藤さんの中に沈澱していったものが吐き出されて、この本になっていると、私には思われるからです

（四）「オッペケペー」追っかけ 52 年

「オッペケペーと演歌の心」には、「私のオッペケペー」という項目があって、内藤さんの「オッペケペー」遍歴が詳しく述べられています。52 年間追っかけています。「オッペケペー」を知ったのは、1965（昭和 45）年に劇団新人会が上演した福田善之作「オッペケペ」を見たからです。NHK の大河ドラマ「春の波涛」では中村雅俊が歌い、これは録音してあります。自由民権 100 年の集会では現代の演歌師・桜井敏雄氏が歌いました。集会場で聞いています。研究書では西沢爽著「日本近代歌謡史」上下と資料編、合わせて 5000 ページ、揃価 8 万円＋税を購入しました。「オッペケペー節」について 72 ページにおよぶ論文が収録されています。CD は 1997 年東芝 EMI が出した「甦るオッペケペー」副題は「パリ万博の川上一座」、2500 余円。これも購入しています。このように教材集めは徹底しています。そして現地踏査も綿密。谷中霊園の銅像台座、10 年前、川上音ニ郎の菩提寺・博多「勅賜承天禅寺」にお墓参りに。しかし、格式が高くお参りの許可が出ず、墓参はいまだ果たしていないそうです。福岡・博多座の近くには、音ニ郎像があり、この本に写真が載っています。

「オッペケペー」上演の経過、歌詞の内容と歌の果たした役割、そして、「万座の観衆によるヤンヤの喝采こそ音次郎の生き甲斐であった」という内藤さんの音ニ郎評など詳しく述べられています。

（五）コラム「人間の運命について」

このコラムは源義朝の死を扱ったものですが、どこで、誰が、いつ、どうしたかが的確に記され、平明で、余分なものは削ぎ、確かに現地でイメージがふくらんでます。何回読んでも心地よいリズム。筆写したくなる文章です。写真も文意をふくらませています。

この本のどのテーマでも、じっくり仕込み、現地でふくらませ、心地よいリズムで、一気に読ませます。（2017. 4.21「内藤真治先生と行く春のフィールドワーク」で秩父に出かける朝）